

担当部署：北見農試・研究部・作物育種グループ

7) *⁷ 特性検定試験等の成績による。

2. ばれいしょ「北育15号」の特記すべき特徴

ばれいしょ「北育15号」はポテトチップ用で、高いポテトチップ加工適性を有し、特に長期低温貯蔵後の品質は「スノーデン」以上である。枯ちよう期は「スノーデン」より早い中生で、規格内いも重は「スノーデン」よりやや多い。ジャガイモシストセンチュウ抵抗性と中程度のそうか病抵抗性を持つ。

3. 優良品種に採用しようとする理由

近年、作付面積、生産量とも減少傾向にあるばれいしょにおいて、ポテトチップ用は平成以降安定して30万トン前後の消費量で推移している重要な用途である。北海道における栽培面積は12,518ha（平成22年、北海道農政部調べ）であり、概ね生産年の8月から翌年の6月まで原料として供給されている。

ポテトチップ原料は、品質の面からメーカーでは使用時期によって品種を使い分けている。その中で翌年の3月以降に使用される品種は、芽の伸長を抑制するため低温下で貯蔵されることから、チップの焦げの原因となる還元糖が増加しにくいことが重要である。現在、最も長期貯蔵に適した品種として「スノーデン」が北海道産原料の3～6月まで使用されているが、枯ちよう期が中晩生と遅く、発生面積が拡大し続けているジャガイモシストセンチュウに抵抗性を持たない。このため、今後の安定生産が大きな問題となっており、これらの形質を改善した長期貯蔵向けの品種育成が強く求められている。

ばれいしょ「北育15号」は、「スノーデン」と比較して枯ちよう期が早い中生で規格内いも重がやや多く、ジャガイモシストセンチュウ抵抗性と中程度のそうか病抵抗性を併せ持つ。ポテトチップ加工適性は高く、長期貯蔵後では「スノーデン」以上に優れ、さらに近年普及が拡大しているエチレン貯蔵においても5～6月まで高い品質を維持できる。一方、「北育15号」のでん粉価は低い。でん粉価が低いとポテトチップ製品歩留りが低下して生産コストが増加するため、メーカーによる原料買入価格の等級が下がることが懸念される。しかし、長期貯蔵後の使用では上記の優位点に加え、他品種では不可欠となる5～6月のブランピングが必要ないことや、原料不良率が低いことで生産コストは相殺されるため、総合的な実需評価は高く、生産者の不利益にならない措置が期待できる。

以上のことから、「北育15号」を北海道の優良品種とし、ブランピングが必要となる時期の「スノーデン」に置き換えることにより、長期貯蔵向け高品質ポテトチップ原料の安定供給が可能となり、北海道産ばれいしょの安定生産および栽培振興に寄与するものと考えられる。

注) ブランピング：貯蔵中に増加した還元糖を取り除くための湯通し作業。チップの色は良くなるが、燃料費の増加やでん粉の流出など生産性が低下する。

4. 普及見込み地帯

北海道の加工用ばれいしょ栽培地帯

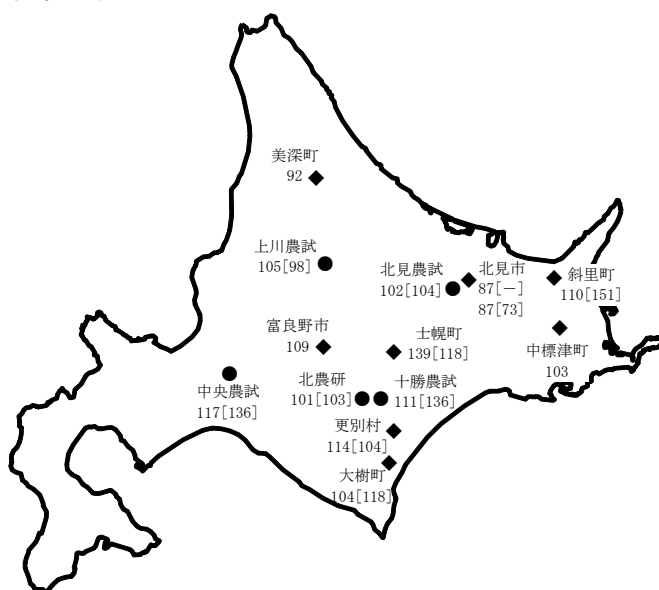


図 各試験地における「北育15号」の規格内いも重、中以上いも重の「トヨシロ」、「スノーデン」対比(%)

注1) 数値は「トヨシロ」対比であり、[]は「スノーデン」対比。北見市は、上段が平成23～24年の「トヨシロ」対比で、下段が平成24年の「トヨシロ」、「スノーデン」対比。

2) ●は試験研究機関で規格内いも重対比、◆は現地委託試験で中以上いも重対比。

3) 試験研究機関は、北見農試（平成20～24年）、中央農試（平成23～24年）を除き、平成21～24年の平均。現地委託試験は中標津町（平成24年のみ）を除き、平成23～24年の平均。

5. 栽培上の注意

- 1) でん粉価の向上を図るため、多肥を避け、早植え、浴光催芽などの基本技術を励行し、完熟塊茎の生産に努める。
- 2) 中心空洞の発生を防ぐため、疎植を避ける。
- 3) 塊茎腐敗抵抗性が“やや弱”であるので、疫病防除を適切に行う。

※本成果は新たな農林水産政策を推進する実用技術開発事業により得られたものである。